

第二百四十三話 知られざる海軍の狡知！（？）

海軍と支那事変との拘わりについては意外に知られていない。支那事変は陸軍の戦い（戦争）であり、海軍はいわば第三者（的）とのイメージが強い。しかし、海軍が支那事変に如何に対応したのかを見てみると、知られざる海軍の別な顔が見えてくる。

1 第二次上海事変（1937/8/13）と渡洋爆撃

独顧問団に訓練された国民政府軍は、在上海海軍艦艇の攻撃を含む上海攻撃を敢行した。警備担任であった海軍の特別陸戦隊は敢闘するも、厳しい状況が続いた。海軍は陸軍師団の派遣を要請すると共に渡洋爆撃を計画実施した。不拡大主義者であった米内光政海相だが、海相は強硬に派兵を主張してそれを認めさせた。近衛首相は、15日0130「暴支膺懲」声明を発した。斯くして、15日上海派遣軍が編成され、海軍は前日延期された九州から南京への渡洋爆撃を開始した。悪天候を衝いて長駆（往復1000海里以上）東シナ海を横断し、迎撃機や対空射撃の中で敢行された爆撃は渡洋爆撃の名の下に世界的壮挙であるとセンセーショナルに報道され多くの国民に感銘を与えた。「世界戦史空前の渡洋爆撃」と自賛もした。その後も、上海、南京、揚州、九江、考感、徐州、広東など、大陸側に基地が確保される年末まで渡洋爆撃は続いた。

政府は、17日、事変の不拡大方針を放擲、帝国議会は、臨時軍事費約20億（海軍は航空戦力増強のための4億円）が認められた。渡洋爆撃の戦闘実績が強調されたのは言うまでもない。陸軍は統制線は無視して南京への追撃を、海軍も南京空襲を敢行した。空襲による被害規模は定かではない。海軍の都市爆撃に対する国際連盟の非難決議を受けて、FDRは有名な「隔離演説」を行った。

2 1937年から41年まで、海軍は空爆作戦の継続

3 広東省の三灶島に海軍航空基地そして海南島の占領

海南島は、援蒋ルート遮断にも益し、且つルソン島を攻撃し得る地位にあり南進する際の重要な拠点たりうる。陸軍の同意を得て、1939年1月海南島攻略が決定され、19日命令が発令され、攻略は順調に進捗した。海南島は事後海軍の作戦基地として重要な役割を果たしていく。



4 重慶爆撃（1938/11～1941/8）

重慶爆撃は、市街地の破壊（と住民殺戮）を目的とした都市無差別爆撃であると評されている。中支派遣軍が、地上戦の手詰まりを打開するため陸軍航空部隊により、次いで海軍航空部隊をも参加して重慶大空襲が連日のように繰り返されたという。重慶は瓦礫の街と化し、住民の被害も大であったが、国民党・重慶政府の抗戦意思を挫くことは出来なかった。

中国空軍との空中戦が、海軍航空隊搭乗員の格好の実戦訓練となったことは確かであろう。百一号作戦なるものがある。1940/5/17～同年9/5までの3ヶ月、海軍の連合空襲部隊と陸軍重爆隊の重慶などへの協同空爆作戦である。この作戦に零式艦上戦闘機（零戦）が初投入され、赫々たる戦果を挙げた。この作戦には大西瀧次郎中将と山口多門少将が夫々指揮官として参加している。

翌年には、一〇二作戦が行われたが、これは対米戦に向けた大実戦演習であるとも云われる。

5 南部仏印進駐（1941/728）

日本は南方進出の基盤獲得の為に南部仏印に進駐した。北部仏印進駐と南部仏印進駐ではその目的が明瞭に異なり、日米の認識ギャップはあったが、米国が戦争を決意した。

* 予算獲得に成功し、着々と南進準備を進め、実戦的訓練を行った海軍の顔が見える。対米戦を意識している限りにおいては、軍事的には当然の措置ではあるが・・・

（了）